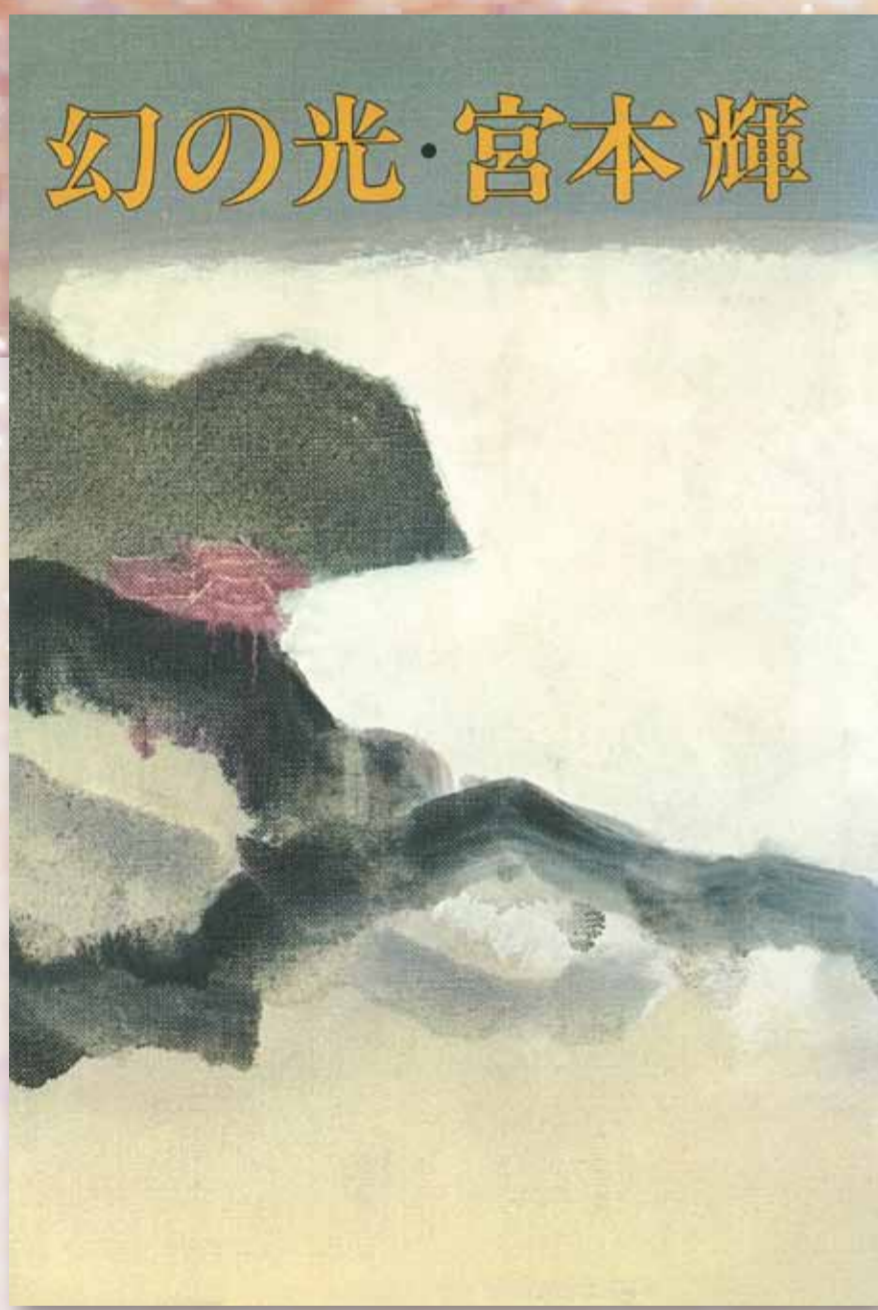


幻の光

「ひょっとしたらあんたも、
あの夜レールの彼方に、
あれとよく似た光を
見てたのかも知れへん。」



1979年 新潮社

「Story

主人公・ゆみ子は、乳飲み子を抱えたまま、ある日突然、鉄道自殺というかたちで夫・郁夫を亡くす。理由もなく愛する人を失った心の傷を抱えたまま、ゆみ子は奥能登に暮らす民雄の後妻として子どもとともに嫁ぐ。

奥能登の荒々しくも美しい自然の中で、ゆみ子は新しい家族とともに幸せな日々を紡いでゆくが、自殺した郁夫への語りかけを止めることができない。「なんであんたは自殺したんやろ・・・」。ゆみ子の問いに答えはあるのか？生と死、喪失と再生のはざ間で、ゆみ子は揺れ続ける。

奥能登の光と影

「幻の光」は、宮本輝氏が芥川賞受賞後の第一作目となり、奥能登を舞台に、人間の生と死、喪失と再生に焦点を当てた31歳の時の作品である。

作品の舞台は、宮本氏が旅行雑誌の中で偶然見つけた奥能登・曾々木海岸の写真から生まれた。奥能登の荒々しい自然が創り出す光と影が、人間の生と死を想起させるこの作品は、海外でも広く翻訳されており、多くの人々の心を打っている。

『幻の光』雑誌『新潮』（1978年8月号掲載）／『幻の光』（新潮社、1979年7月刊）／
『幻の光』新潮文庫（新潮社、1983年7月刊）／『환상의 빛』（韓国語）（CIRCUS、2010年4月刊）／
『幻之光』（中国語・簡体字）（上海文艺出版社、2013年10月刊）／
『PHANTOM LIGHTS』（英語）（KURODAHAN PRESS c/o INTERCOM,LTD、2011年刊）

ゆみ子の心の声ー喪失と再生

後妻として新しい生活になじんでいくが、心の中で、死んだ前夫・郁夫への語りかけをやめられないゆみ子。人間の喪失感は一瞬、いつにならう癒されるのだろうか。寄せこぼれる波と、波間にゆらめく光の描写に、人間の繊細な心の揺らぎを感じた。